

# お釈迦さまの成道（悟り）

住職 黒田 武志

十二月八日は「成道会<sup>じょうどうえ</sup>」と申しまして、お釈迦さまがお悟りをひらかれたことを祝福し、そのご偉徳にすがって、更に精進を新たにしようとする日であります。

カピラ城を出離して沙門<sup>しゃもん</sup>となったお釈迦さまは、マカダ国の首都・ラージャ・グリハに師を求められました。

当時、コーサラ国と並ぶこの富強な国は、新しい思想家たちの集まるところでもあったのです。パンタヴァア山に籠って修行を始められたお釈迦さまは、仙人といわれた代表的な思想家たちを次々に訪ね、そしてことごとく絶望されて

やがてウルヴエーラを目指します。

悟りを開かれる前のお釈迦さまの苦行というもの、すさまじいものでした。

当時のインドにおいては、苦行と瞑想<sup>めいそう</sup>が、悟りへの唯一の方法と考えられておりましたから、お釈迦さまもまた、老・病・死の苦しみや別離、愛憎の苦悩<sup>あいきん</sup>のない安心の世界を求めて、孤独で苛烈な修行に励まれたのでありました。

一日に一粒の米と麻の実だけで過ごす絶食の行。灼熱に耐える行。呼吸をとめる行……。肉体からの解脱を求めて、あらゆる苦行をなさいました。その姿は、苦行を共にした五人の修行僧たちを驚嘆させ、深い尊敬の念を抱かせました。

しかし、息も絶え絶えの苦行の果てに、お釈迦さまは、いたずらに肉体を責めても何の悟りも得られないことに気がつかれて、当時絶対的な手段とされていた苦行に、決然と終止符を打たれたのでした。

のちにお釈迦さまが説かれた「中道」は、仏教の中心的な教えのひとつでありますが、それはこの時の苦行の経験が基盤となつていると考えてもいいのではないだろうか。

「いたずらに肉体を苦しめることはかえって悟りへの阻さまたげとなる。肉体に執着もせず、また苦しめることもない中道こそ、悟りへの道である」と、お釈迦さまは私たちに教えてくださっています。

しかし、たとえ捨てたとはいえ、六年間を費された厳しい苦行は、お釈迦さまの偉大な意志力を支える力になっておりました。苦行するお釈迦さまは、ひとりの人間として、ひとりの求



道者として、その孤独なお姿に、激しいなつかしさを感じてなりません。なぜなら、その時のお釈迦さまは、私たちと同じように、人間ゴータマ・シツダルタとして自らの救いを得んがために苦悩しておられていたからです。仏陀と知られてからの、私たちへの普き大悲心への慕わしさとはちがって、人間としての深い孤独と苦しみが、私たちの心を揺さぶります。

苦行を捨てたお釈迦さまは、ウルヴェーラ村のセーナー部落、尼連禪河のほとり、スジャータという村の娘から、乳粥ちちかゆの施しを受けて、体力を回復されたといわれています。この様子を見た五人の仲間の修行僧は、「ゴータマは墮落した。」と絶望して、お釈迦さまを捨てて立ち去って行きました。

ひとりになったお釈迦さまは、尼連禪河で沐浴して身を清め、かたわらの大きな菩提樹の下に結跏趺坐けつかふざ（古代インドに伝わる坐法で、現在

禪宗で行う坐禪の姿でもあります。両足のうらを上向きに両ももの上にのせて坐ります。）して禪定ぜんじやうに入られました。

私たちが今「菩提樹」と呼んでいる樹は、もともとはピッパラ樹といっておったそうですが、お釈迦さまがその樹の下で菩提を成就されたので「ボーディールツカ（菩提樹）」と名づけられたといわれます。

またこの時、一人の草刈人が、お釈迦さまが坐られる岩の上に、吉祥草という大変貴重な草を、敷物の替わりにと布施したということです。そしていよいよ、大悟のときがやってきました。

十二月八日。夜が明けきろうとする空に、暁あけの明星めいせいがきらめきました。その時、お釈迦さまは豁然として大悟たいごされたのです。その大悟とはどのようなものであったのでしょうか。

……

万法（すべての存在）はいつもそのあるがままの相をあからさまに露呈している。これがあるがままに見ることができないのは、人間のまなこが迷いや苦しみ、妄執に覆われているがため、存在それ自体が覆われてあるのではない。ならば、諸法の実相に直かに触れるためには、人間のがわに張りめぐらされた覆いを取り払えばよい。

このようにして、お釈迦さまのまえに、万法がことごとくそのあるがままの相を開いてみせたのであります。

私たち禪宗においては只管打坐しかんたざということが重要視されますが、これは、ただひたすらに坐して、身心脱落しんじんたつらく、すなわち、迷妄、愛憎（執着）、先入観、それらをすべて脱落させて自己をあきらかにしようとするもので、お釈迦さまの大悟に至ろうとするいとなみでもあります。

ともあれ、お釈迦さまはこの大悟ののち、長い思索の時を持たれ、自ら悟られた法をひとりでも多くの人々に説き伝えようと決意なさいました。

私たちは、お釈迦さまが迷える衆生に法を説こうと決意なされたことに、心から感謝しなければなりません。

自らの悟りを得るためであれば、お釈迦さまは、大悟の歓喜と法悦のうちに一生涯を終えられてもよかったです。しかし、六道の苦界に沈み、無明むみょうの中で流転をつづける人々をみつめて、大悲の涙を流されました。この人々を救いたい、ところがお釈迦さまが悟られた法はあまりにも高遠で、衆生の知恵はあまりにも低すぎるのです。大変困難な作業であります。どのようにして法を説くべきかと、長い間苦しまれたに違いありません。

お釈迦さまは、法悦を自分おひとりものものと

THE Museum  
in Lahore  
Fasting Badaha



なさらず、それがいかに困難であつたか。にもかかわらず私たちが有情に残さず分け与えようとなさつたのです。このことに、私たちはいまあらためて感謝したいと思うのです。

お釈迦さまは、大悟と同時に抱かれた大悲心<sup>だいひしん</sup>によって、人間にただひとりの例外もなく仏性を認め、救済の可能性を見出されました。

私たちはその大悲心にすがつて、より多くのお釈迦さまの言葉を聞き、安心<sup>あんじん</sup>の世界に導かれてゆきたいと思ひます。

「おこたらず励むように」というお釈迦さまの最後の言葉を全うすることこそ、大悲心に報いる唯一の方法であるうかと思ひます。